

覚悟を感じた瞬間<sup>と き</sup>

仕事に対する責任と誇りを感じないまま、私は外食企業の品質管理の業務に従事していた。就職氷河期といわれた時代で、これといった動機もなく、私は就職してしまった。他にやりたいことがないわけではなかったが、自分なりに頑張つて、やっと獲得した内定先が嬉しかったのだ。どうか一社決まった安心感と満足感が、私に入社を決意させた。

食品に関する異物混入の報道が連日世間を騒がせたのは、入社後6年の2015年、私の第一子、長女が産まれた年であった。私の会社も例外とはならず、報道の真っ只中に投げ込まれた。仕事は顧客からの苦情の対応で、それまでとは一変した。家族と過ごす時間は極端に減らされ、謝罪に明け暮れる辛い毎日が続ぎ、正直私は、仕事に嫌気をおぼえた。

そんな苦境を経て、報道も幾分落ち着き、会社も徐々に日常を取り戻してきた頃であった。私は土曜の昼を共に過ごそうと、初めて家族を自社のレストランに招待した。「何でも好きなものを頼みなさい」と、妻と娘に言うと、娘はしばらく悩んだ末、先日報道の対象となっていたあの商品を選んだのである。世間のことなど全く知らない娘は、嬉しくつて、楽しくつて、満面の笑みで、口いっぱいにあの商品を頬張つたのである。

口をパンパンに膨らませた、愛くるしい娘の無邪気な笑顔を見た瞬間、もしこの商品に異物が入っていたら、安全でなかったらとの考えが、私の脳裏をよぎった。この時私は、自分の仕事が急にとつともなく大切なことに感じられてきたのであった。自分の仕事と娘の笑顔が、一直線に繋がったのである。

工業製品ではない食品製造場面において、異物混入をゼロにすることは至難の業だ。しかし、あの時娘が見せた笑顔こそが、そうした困難な任務に立ち向かわせる勇氣と覚悟を私に与えてくれたのであった。

私は今、ありつただけの自信を持って、家族を自社のレストランへ招待したいと思う。